

Title	秋元律郎著 『政治社会学：現代社会における権力と参加』
Sub Title	Ritsuo Akimoto, Political Sociology : Power and Participation in Contemporary Society
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1974
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.47, No.10 (1974. 10) ,p.120- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19741015-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

秋元 律郎 著

『政治社会学——現代社会における権力と参加』

政治社会学はむずかしい学問である。むずかしいというのは、それが政治学と社会学の交錯した部分を対象とする学問として独立しているのか、あるいは社会学の方法をもつて政治の領域に切りこんでくるものなのか、が分らないからである。この点では、政治社会学者をもつて任じている人たちもかなり苦んでいることがわかる。たとえば綿貫譲治さんは「社会学講座」第七卷『政治社会学』（東京大学出版会、一九七三年）の第一章「政治社会学の位置」の中で、かなり詳細にこの問題を論じている。

綿貫さんは、結局は、政治社会学の一つのありうべきものとしてその論文集を編集されている。私はそれに異論はない。ただ私が「政治社会学」という言葉をきき文字を見るとき、ふと思いだすのは、私が政治学科に学士入学をした一年目に藤田省三さんに会ったときの彼の一言「政治学は社会学ですよ」である。何か禅問答に似

ているけれども、この言葉とM・ヴェーバーの「社会学とは、社会的行為を説明しつつ理解し、これによつてその経過とその結果とを因果的に説明しようとする一つの科学のことをいうべきである」(『社会学の基礎概念』、傍点Ⅱ内山)とを重ねあわせつつ思い考えてゆくことから、どうやらこの袋小路をぬけることができはしないか。

こうした私の一種の悪あがきにたいして、ここで紹介しようとする秋元さんの新著は、「政治学社会学化、社会学の政治学化」という、ある意味では大それた、それだからこそ野心的な意図を明らかにしている点で面白い。それは、ヴェーバーが「べきである」といつた意味では秋元さんだけのものであろう。この書物の構成には、私自身、ちよつと首をかき上げるところもあるのだが、現在、あらゆる社会科学が研究者個人の手許でのそれこそ彼の全人格的格闘を要求し、その格闘のすえにもう一度提出されることを要請している、という事態を思いあわせるならば、秋元さんのこの知的格闘にこそ敬意を表すべきである。

いいかえれば、秋元さんが『権力構造』と『政治参加』を軸として、そこに問題領域を設定していつた(二五三頁)こと、そして「われわれの前にたちはだかる権力構造のメカニズムを問題としていく過程で、わたくしは主体の側——いいかえるなら現代のデモクラシーの体制の変動と維持にかかわる参加の主体についての分析を、どうしても必要としてきた」(二五四頁、傍点Ⅱ内山)と告白されている、そのことを通して本書に秋元さんの人間たらんとする苦闘を見るべきではないか。

それによつて、私たちは、「秋元序説」を読みとり、彼を追体験すること、次なる眺望を私たちの内にひらく糧をうる。もちろん、書かれたものは、書いた者のごく一部であるはずである。一斑をもつて全豹を占うことはできないことを銘記しつつも、なお秋元さんを見透したいと希うは非礼である。その非礼をあえておかす愚を許したまえ。

※

第一章「政治社会学の位置づけと課題」はまさに「序章にかえて」にちがいない。すなわち、「方法序説」である。ここでの秋元さんの論述はかなり辛そうである。それは当りまえであつて、自分を露呈しながら露呈しまいとす、いわば学者の正念場だからである。

この正念場は、だから、私ひとりの分り方が正当にできるのであり、読む者がそれぞれ評価しなければならぬところである。

この評価は、人間の内なる神々の争いを意味するのであつて、賛成とか否定という意味での評価が許さるべきところではない。なるほどとも思はず、ちがうともいつてはならないだけの内実をもつてゐる。だから「伝統的政治学からの脱却の途は、ここでも単線的に政治社会学に流れ込んでゐるわけではない」（九頁）を一応だしておきたい。もう一つは、政治社会学とデモクラシーがひつかけられてゐる点を指摘しておきたい。〈デモクラシーの政治社会学〉ではないといふことの意味を考えておく必要があるにちがいない。

この二点を留保しておいて、第二部「権力構造とリーダーシップ

ブ」、第三部「政治行動と参加」、第四部「政治文化と政治変動」に含まれた第二章から第九章までを、問題指摘的にとりあげて見ることにしよう。

※※

権力という余りにも厄介な問題を抜いては、現代社会を語ることはできない。だが、その権力は、正当性を付与された政治機構の中に、ビルト・インされ、デモクラシーを正当とするにちがいない現代の人間の省察の手や眼をすり抜けてしまうところもある。また国家権力という考え方をしてみると、それはまたリヴァイアサンにも似て、私たちの思惟の構造をはみだし、善悪の問題の海に没してしまふおそれもある。それだけに、権力は、人間が人間であらんとする歴史的苦闘の中から、人間のために、成立し展開されたものであることを、いま思い識ることが何よりも必要である。

このようにのべたことは、権力を自分の手の届くところにあるものと考えるための認識的操作を何よりも必要とする。秋元さんが「権力構造」と見据えるのは、権力を彼岸に去らせないためのたすまいにちがいない。それだからこそ、多元主義と権力エリート論を対立的認識視座ととらまえて離さない。代表的にはC・W・ミルズとD・リースマンがそれぞれを語る。

これらのナショナル権力のたすまいを問題とするのは、「権力の分布と行使にかかわる問題が、現代デモクラシーにたいする現状認識のうちにもとめられなければならない」（三八一―九頁）からで

ある。秋元さんの構図の中には、「ミルズにおいては、権力集中社会への移行という認識のうちに、少数エリートへの権力の集中とこれと分断された大衆が問題となつてゐるのにたいし、リースマンにおいては、中間水準での拒否権行使集団への権力拡散のかもしれない状況が焦点となつてゐる」(四一頁) 認識が画定されている。

だが、この両者に対する批判(第二章「現代社会の権力構造」第三節「権力エリート論批判」および第四節「権力構造分析の問題」)点を読めば、権力エリート実体論がそのまま成立することはないとはいふものの、権力エリートを成立させる機構的基盤も存在する、そうした認識的現実が浮びあがつてくる。したがつて、右のそれぞれの論拠は仮説としての意味を重大にもつてゐるのであり、最終的には経験的検証に委ねらるべきことではある。

しかし、この仮説は実は「権力」に関するがゆえに経験的検証を拒否するところがあるはずである。というのは、「現代」を省察することは、少なくとも、「政治」を指定することにならざるをえない、という意味あいでは、権力観・権力構造観が「現代」観を定礎するにちがいないからである。ましてや、「権力構造」の分析にむかうとき欠くことのできないのは、それがけつして自己から切り離されたかたちでの認識にあるのではなく、つねに政治参加という主体的契機との関連のうちにとりあげられなければならない。(五六頁)とすれば、私の指摘は「政治学」の立場にはかならない。ここいらに、政治学と政治社会学の違いがあるのではないだろうか。すなわち、〈認識〉と〈仮説〉とは決定的な差がある。

私のいう認識は、しかし、印象論的思ひつきをいうのではない。むしろ、分析的事実を支えられ、しかも分析を嚮導するものである。その場合の分析は、アメリカ政治社会学が得意とする意味での「経験的」分析に限定される必要はない。むしろ、この種の経験的実証を永遠に不完全なものと思ひなすだけの知的理性をこそ、現代の政治学は必要としてゐることを明らかにしておきたい。この意味からすると、近年もてはやされてゐる「学際」研究なるものに没字問的主体性を想う。

話を元に戻さねばならない。権力構造の視座を一般論としての認識に求めた後に、秋元さんは、それをさらに手許にひきつけるために関心をコミュニティに集約する。〈デモクラシーの現実〉がコミュニティに顕在化するのには当然といえる。多人種を社会構成のキーポイントとするアメリカにあつて、こうした問題意識は何よりもデモクラティックである。秋元さんはこの事情を次のように語る。

コミュニティの政治的現実が検討の場にさらされなければならないかつたというのは、それが、こんにちの大衆社会において、あらたな政治的変動とデモクラシーが直面するもつとも緊張した部分としてあらわれ、またそのかぎりではデモクラシーの基底的な単位としてのコミュニティ・レベルにおける権力構造の再編という問題を避けてとおるわけにはいかなかつたからだということができる。(六〇頁)

このコミュニティの権力構造が、「とりわけ都市化・産業化の過程にある都市においてするどく問題にされているのは、そうした変

化の過程にあつて、まづさきに検討をもとめられなければならないかつたのが、都市社会における政治変動にあつたからである。」(六一頁)

この問題領域の整理と理論状況の解明は見事に語りつくされていゝ。それは工業化という生産様式の拡充が、都市化という生活様式と表裏をなして発達していつたアメリカ的状况の中で熾烈に問題の所在を突きとめていつたアメリカの研究たちの意識が、まさしく「歴史としての現代」の致命的な側面を剔抉するに十分だつたし、それをうけた秋元さんの知性と情熱が全投入されているところだからでもある。多元主義、権力エリート論が、R・A・ダール、N・W・ポルスピー、R・E・ウォルフインガー、そしてF・ハンター、C・W・ミルズと多彩に語られ、秋元さんの手にかかつて整序される。

地位、声価、決定の三つのアプローチが批判的に取りあげられ、さらに権力エリート論と多元主義による分析が詰められれば詰められるほど、こうした方法の基底をなす思想との問題、すなわち「方法論」の問題が色あせ、実証上の調査方法の妥当性をめぐる論争に墮してゆく過程がしかと見さだめられているところは、さすがである。「全体的な傾向として、いわゆる操作主義的な分析技術が精緻さをきわめればきわめるほど、それは、よりトータルな権力構造の理解から遠のき、ナショナル・レベルの政治過程への展望を欠いてきたことは否定しがたい。そして同時に当初いだかれていたアメリカ・デモクラシーの現実をたいする危機感がうすれ、技術的な分析操作

の側面がすくおしだされてきたこともたしかである。」(八四頁)

こうした問題を重大に留保しつつ、秋元さんの危機感、権力構造分析の軌跡をたどりながら、人間の生活の場としてのコミュニティを見ようとする姿勢を崩さない。すなわち、コミュニティをかす人びとの構成を明らかにすることを通じて、秋元さんは、いつの間にかコミュニティ構成員を政治主体者としての市民と見つけている。だから「草の根」がいかにルートでないか、が始終気になっているのが分る。したがつて、あらたな住民の政治参加という言葉が飛びだしてくるのが全然おかしくない。

秋元さんが第三部「政治行動と参加」を次にだし、そこに第五章「政治参加と政治的無関心」、第六章「投票行動と参加」、第七章「社会運動における参加のメカニズムと組織過程」を含めているのは、いわばナチュラルであるし、間然するところがない。

無関心と疎外、この識別しにくい概念を腑分けできるのは社会学のものに属する。M・シーマンの疎外概念の整理などは、私たち政治学者などは目を輝かせるところであろう。しかもマンハイムの機能合理性と実質合理性との背反性が増えられ、自己疎隔を現実のものとして指摘されると、人間像がどうしようもなく分明になる。R・ブラウナーの導入も説得力をましている。「もし人間の自由が最高の価値であるならば、最終的にわれわれの目標は、無関心と参加を対立的にとらえることにあるのではなく、両者のあいだでの自由を選択する同等の機会にある」というG・D・バルマの宣言が肯定的にひきだされてくると、疎外が無関心と、さらには参加と連関さ

れ、どちらにしても政治的主体性の対象におきなおされるところは、秋元さんの懸命さか。

第六章の投票については読み通すことができよう。しかし、第七章になると目配りが必要になつてくる。秋元さんに語ってもらおう。

重要なことは、こんにち社会変動と構造的に深くかわりをもつ運動が、デモクラシーの体系の変動と維持にたいしてもつ政治的含意を、その発生を促す現代社会の諸特性のうちにもきわめ、そこでの運動のメカニズムをあきらかにしていくことにある。(二八二頁)

そこで社会運動を語ることができるようになるのだが、運動参加の動機の論点を語り、それを別の面から見ることになる参加意思決定の側面も明らかにされる。そうした個人的契機に拠る運動形成から運動組織化さらには制度のプロセスの論脈は味読に値する。もちろん、ここで運動の生成から消滅のダイナミクスが語りつくされることはない。そのむしろ評価的な運動の力学は政治学に属することを秋元さんは知っているからである。

ここまでの文中にも行間にも、人間の存在を求める息づかいが充満している。だが第四部「政治文化と政治変動」に含まれる第八章「政治的近代化と比較政治体系分析」と第九章「変動と政治発展」になると、「政治文化と政治構造の関連に目をすえることによつて、こんにちわれわれがあたらしい世界のうごきのなかで直面している政治変動と安定の問題に迫る糸口をみいだそうとする試みに、つよ

くかわつてくる」(二八頁)と前提されることで、逆に人間はその存在を潜めるかのようなのである。それは何か、今までの秋元さんから政治社会学者秋元律郎となつて、人間世界のたすまいとありようを綺麗に——しかし秋元さんの存在証明を提出しつづ——示してくれるような、一種の異和感を思つたのは、私が「秋元序説」にオーバーコミットしたためかもしれない。

※※※

〈権力〉と〈参加〉。思えば人間の営為は、この両者の絡みあいとして、はたまた一方の他方への優位として歴史を貫通してきた。その意味で、政治の腑分けは、この両者のストラグルと見てよい部分が大きい。

しかも、人間が人間であるためには、人間が人間を統御し、そしてこの関係を固着しないだけのエネルギーの発動が必要である。だが、この「発動」によつてもたらされる変動をも制度の中におさめてしまふならば、それはいつの間にか、権力と参加を制度上の機構と化すことにもなる。代議制民主主義が自由民主主義と社会主義的民主主義を包摂する観念として定着し凝固したときに、このエネルギーは私的滞留の一途をたどり、人間変革への道を閉ざされたといえるのではないだろうか。

〈参加〉という観念のもつ歴史性が、この枯渴状態から人間を脱出させることが可能かどうかの論をなすことはできない。私たちにできるのは、参加への意思と参加への志向を理性的に認識すること

を一つとし、そうした人間のいとなみを確実に理解することをもう一つとする。そのことこそがまさしく、「歴史を生きたこと」にはかならない。この人間たらんとする流れへの参加は厳しい自己確認を要請する。秋元さんの本書は、自分を見失いたくない人びとに捧げる人間への賛歌であるに相違ない。

(早稲田大学出版部刊、昭和四九年、A5判、二五五頁、千八百円)

内山 秀夫